

# 第1回 食に関する指導研修会

平成29年12月3日（日）ウィルあいちにて、愛知県総合教育センター 相談部 特別支援教育相談研究室 研究指導主事 倉知利勝先生をお招きし、「特別な教育的支援を必要とする子どもへの対応～食の困難さへの支援を中心に～」の演題でご講演をいただき、研修会を行いました。当日は110名の会員が参加し、子どもたちの障害に関する基礎知識や支援の手立てについて学びました。

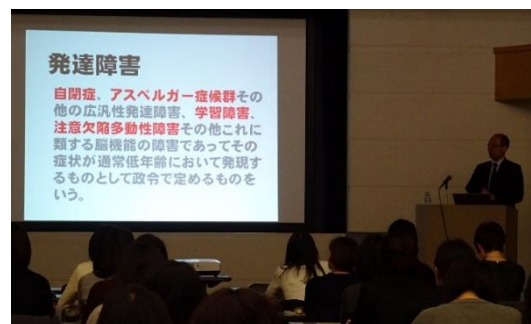


【倉知利勝先生】

## 1. 発達障害の基礎理解

発達障害は、複数の障害をもっている場合があるので、障害名だけでその子どもの傾向を決めつけてはいけません。また他の子どもと違う見方、感じ方、とらえ方をするため、そのことを理解しないで対応すると、極端な問題行動、暴力、家出などの二次障害を引き起こしてしまうことがあります。子ども一人一人をよくみて、適切な対応をとることがいかに大切であるかということを知りました。

またASD(自閉スペクトラム障害)、ADHD(注意欠陥多動性障害)、LD(学習障害)などの特性や対応方法について、先生のこれまでの豊富なご経験をもとに、具体的な事例をあげながら分かりやすく教えてくださいました。さらに、ASD、ADHDの方のインタビューや自閉症児の目から見た世界の映像などをご紹介くださいました。私たちが発達障害の方の感覚を理解する貴重な機会になりました。



【研修会の様子】

## 2. 発達障害がある子どもの「食」の困難さ

発達障害のある子どもは、どうしても食べられないものがあることを「分かってほしい」と思っている。それに対して指導者は「食べてほしい！」等いろいろな思いが出てしまう。障害からくる「食の困難さ」と「わがまま」の区別はとても難しく、きちんと線引きができるものではない。偏食の改善は、本人と指導者との間によい関係作りができてこそ成し得るものである。保護者ともていねいな話し合いをし、その子どもに合った対応・支援策を個別に考えていくことは、その子の「食」の支援となるだけでなく、学校生活全体を支援することにも非常に役立つ。ということを知ることができました。

あわせて、児童生徒やその保護者と面談する際には、共感的な姿勢をとることが大切であるということや、偏食対応のポイント、感覚過敏とその対応について具体的なお話を伺い、理解を深めることができました。

### 《参加者の声》

映像を交えてのお話で大変分かりやすかったです。障害名だけで子どもを決めつけてはいけないうことや、子どもによって五感から得る感覚の特性などがそれぞれ違うことがよく分かりました。

「ありがとね」は人間関係を変える言葉。大切なことは子どもに食べる機会を与えてあげること等のお話は、さっそく自分の仕事に生かしていきたいと思いました。